

## 2022年度チーム医療推進助成成果報告 ～人工心臓管理について～

\*<sup>1</sup>獨協医科大学病院臨床工学部, \*<sup>2</sup>獨協医科大学病院看護部, \*<sup>3</sup>獨協医科大学病院心臓・血管外科

飯島 裕樹\*<sup>1</sup>, 松下 博之\*<sup>1</sup>, 長谷川 耕美\*<sup>1</sup>, 荒井 洋次郎\*<sup>1</sup>, 山口 剛史\*<sup>1</sup>, 渡邊 雅弘\*<sup>2</sup>,  
亀山 友理子\*<sup>2</sup>, 斎藤 俊輔\*<sup>3</sup>, 柴崎 郁子\*<sup>3</sup>, 福田 宏嗣\*<sup>3</sup>

Hiroki IJIMA, Hiroyuki MATSUSHITA, Komi HASEGAWA, Youjiro ARAI, Takeshi YAMAGUCHI,  
Masahiro WATANABE, Yuriko KAMEYAMA, Shunsuke SAITO, Ikuko SHIBASAKI, Hirotsugu FUKUDA

### 1. 背景

当院は補助人工心臓(VAD)実施施設であり、これまでHeartMateⅡ：4例、HeartMate3：4例、Jarvik2000：2例、Jarvik2000PA：1例の計11例を経験している。症例数としては少なく、VAD装着患者の看護や教育、スタッフ指導などに悩むことが多いのが現状である。

今回、日本人工臓器学会のチーム医療推進助成制度を利用し、他施設の見学を予定した。多くの症例数を経験している国立循環器病研究センターを見学し学びを得ることで、当院でのVAD装着患者の管理に活かしたいと思い、看護師2名、臨床工学技士2名のチームで研修に参加した。

### 2. 内容

病棟ではドライブライン貫通部の管理(消毒・固定方法)、シャワー浴の方法、リハビリテーション、退院プログラムについて見学することができた。方法については手順書が確立されており、その根拠やポイントも記載されていた。退院プログラムの一環である患者・家族に対しての機器取扱教育では、臨床工学技士1名、看護師1名で対応した。VAD外来は週3日であり、臓器移植コーディネーター、臨床工学技士が患者に関わっている。病棟からも毎回看護師1名が外来に出向き、退院後の患者の様子を把握している。外来管理では機器確認、貫通部処置、日常生活の確認を行っていた。

### 3. 成果

創部管理において、固定方法の確立だけでなくスキンケアを重要視することがドライブライン皮膚貫通部感染症(DLI)発症の予防に効果があると学んだ。予防的スキンケアを取り入れた創部管理を行うことで、DLIによる再入院を減少させることが期待できる。また、当院では、退院後に人工心臓管理技術認定士の資格を持つ病棟看護師と患者との関わりが途切れてしまっているのが現状である。移植待機期間が長期化している現在、病棟看護師も主治医、臨床工学技士、外来看護師と連携を取りながら、移植待機期間をサポートしていく必要がある。そのためには、業務上の問題でこのシステムづくりが一番困難な面ではあるが、このシステムが構築されることでVAD装着患者・家族の身体面・精神面を多職種でより深くサポートしていくことができると考えられた。

また、今回の経験を基にスタッフへの手順書を作成し、経験年数・職種を問わず統一した指導を行うことで、退院プログラムをより円滑に行うことができ、在院日数の短縮化が期待できる。

### 4. 結語

国立循環器病センターで研修できた経験は、コアメンバーにとって貴重な経験であり、当施設での管理と重ねて課題点に対する改善点を学ぶことができた。今回の経験を自施設へ速やかに還元し、当施設での管理、教育方法を再構築することで長期化した移植待機期間をより深くサポートできると考える。

#### ■ 著者連絡先

獨協医科大学病院臨床工学部  
(〒321-0293 栃木県下都賀郡壬生町大字北小林880)  
E-mail. ijima@dokkyomed.ac.jp

本稿のすべての著者には規定されたCOIはない。